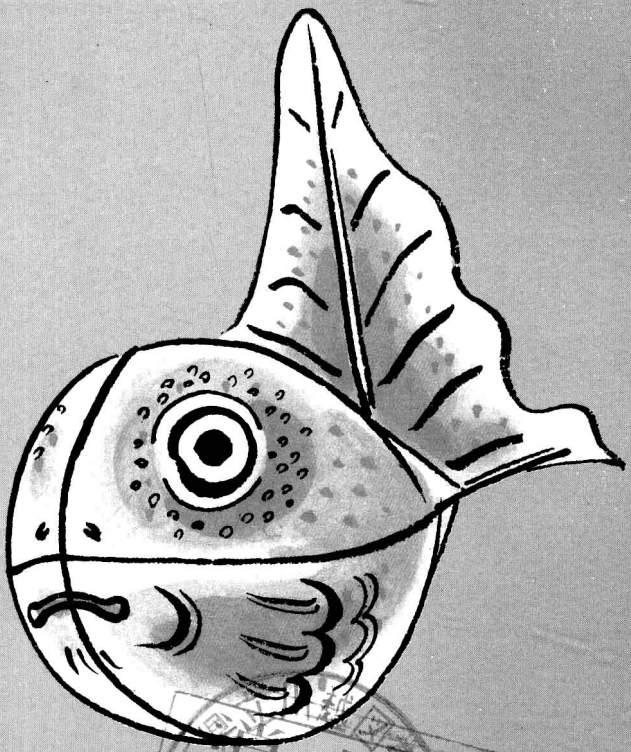
# ネプタの一番だいこ

藤田博保
絵 金沢佑光

# ネプタの一番だいこ

藤田博保／作　金沢佑光／絵



埼玉県立図書館

913
藤田 博保
ネプタの一番だいこ
講談社 1982
150P 22cm
ふじた ひろやす

# ネプタの一番だいこ

昭和57年4月28日 第1刷発行

定価 980 円
著 者 藤田博保
発行者 三木 章
発行所 株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号 112
電話 東京 (03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
印刷所 株式会社 廣済堂
半七写真印刷工業
製本所 黒柳製本株式会社

© Hiroyasu Huzita 1982 Printed in Japan

**著者——藤田博保**
1924年，青森県に生まれる。弘前市立石川中学校教諭をへて，現在著述業。小説「十六歳」「嫁の位置」の2作品が家の光協会地上文学賞を受賞。昭和50年度講談社児童文学新人賞に「甚吉とシャモ」で佳作入賞。「情っぱりとシャモ」「まぼろしの南部馬」「アシカものがたり」「耳切りタロウ」などを講談社から刊行。

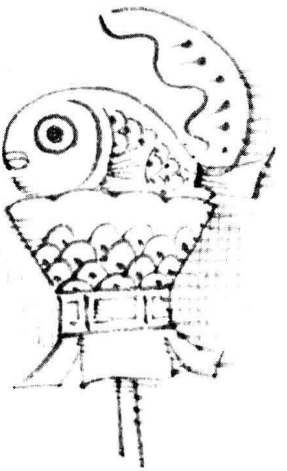
**画家——金沢佑光**
1935年，東京に生まれる。人形劇・郷土玩具・やきものの製作のほかに，絵本・さし絵で活躍中。絵本では，「つとむくんのかばみがき」「こぶとりじいさん」など。さし絵では，「ぼくのとんちんかん」「人魚のひみつ」（以上講談社）など，多数がある。

# ネプタの一番（ばん）だいこ

## もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(1) 謙作のいじ……5
(2) きびしいれんしゅう……38
(3) 一番だいこをきそう……68
(4) 伊助じいさんのけが……95
(5) 一番だいこを打つ伊助じいさん……105
(6) 謙作の決意……128
あとがき……148



## (1)　謙作のいじ

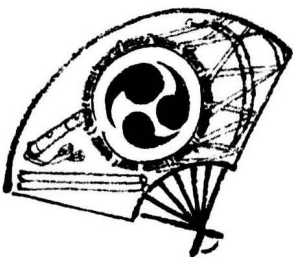
おそい、津軽地方のさくらもさきおわった、五月なかばのことです。

下瀬村高沢の子どもたちは、きょうも学校がひけると、さっそくじどう館にやってきました。

ことしの子どもネプタの、たいこの打ち手をえらぶ話し合いのためです。

ネプタまつりまで、まだ二か月あまりも間があるのに、いまからじゅんびにかからないと、まにあわないからでした。

毎年八月一日から、七日間おこなわれるネプタまつりは、夏の夜空をいろどる、津軽地方



でもっとも大きな行事です。

おなじ青森県でも、ところによってよび名やかたちにちがいがあります。

弘前ふきんではネプタとよび、おうぎ（せんす）をひろげたかたちをしているのに、青森では、武者をかたどった人形がおおく、ネブタとよびます。

どちらも、木や竹をくみあわせてつくった、きょだいな絵どうろう――。

津軽のネプタは、下に台車をとりつけ、まつりばんてんに、まめしぼりのむこうはちまきをしめた、引き子たちがひきます。

「やあれ、やれ。」

「やあれ、やあ～。」

いさましいかけごえとともに、鳴りもののふえやたいこでいせいをつけながら、ネプタは、ゆらりゆらりとすすんでいきます。

ネプタで目をひくのは、はなばなしい絵です。

とくに、おうぎネプタの、正面にえがかれる表絵は、中国の「三国志」や「水滸伝」からとったたたかいの図が、あざやかなごくさい色でえがかれているのがとくちょうです。

石打長用

「三国志」は、二世紀のおわりから三世紀にかけての中国のれきしをかいた書物。関羽や張飛などの英雄が、正義のためにはなばなしくたたかいます。

「水滸伝」も、むかしの中国の書物で、百八ぴきのまものがあばれまわるものがたりです。

表絵とははんたいに、ネプタのうらにえがくのは、あでやかな女の立ちすがたで、それも、かみを長くたらした、すさまじいゆうれいの絵がおおく、これを見送り絵とよびます。

血をおどらせる、武者のたたかいをえがいた表絵は、戦場にむかうときのいさましさをあらわし、見送り絵は、たたかいをおえ、きずついてもどるときの、かなしみをあらわすといわれます。

みちのくのはての津軽は、一年の三分の一を、雪にとざされます。

十一月のなかばに、もうはつ雪があります。

でもそれはすぐきえて、また雪がふり、それを二、三度くりかえすと、もう根雪になります。

津軽は、一月から二月にかけて、もっとも寒さのきびしいときです。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はげしい西風にあおられて、ふぶきがつづき、野も山も町も村も、いちめん雪にとざされます。

ゴーゴーと、ふきすさぶ風の音だけが、たえまなくひびきます。

津軽の人々は、いっぱんに口かずも少なく、もくもくと、くるしさにたえてはたらきます。

それは、きびしいしぜんとたたかい、たえぬいてきたからです。

が、長かった冬も三月になると、さすがに日ざしもやわらかくなり、春のいぶきをかんじます。

でも、雪はまだかたく、大地をあつくとざしたままです。

このころになると、津軽の町や村では、スコップやつるはしで、かたい雪をくだいて土をほりだす光景が見られます。

冬が長かっただけに、春の土のにおいとぬくもりを、まちわびているからでした。

まもなく、田やはたけのしごともはじまって、村は活気にあふれます。

水田のなわしろづくりからはじまって、りんごばたけのひりょうまきがおこなわれ、それ

がおわると田おこし――と、休むまもなく、しごとがつづきます。
やがて、りんごの実すぐりからふくろかけになり、このときは、田植えとかちあって、ねこの手もかりたいほどのいそがしさにおわれます。
それがすむと、のらしごともいちだんらくして、夏をむかえます。
夏になって、人々の心をわきたたせるのは、ネプタまつりでした。

ネプタのおこりには、さまざまないいつたえがあります。
むかし坂上田村麻呂が、えぞをせいばつしたとき、てきのいきおいがつよくて、さんざんなやまされました。
それで、きょだいな絵どうろうをつくって、ときのこえをあげながら夜うちをかけて、みごとにてきをうちやぶりました。
これが、そもそものはじまりといわれます。
もうひとつは、津軽領主の為信が、けらいをつれて京都にでかけたときにまつわるいいつたえです。

いまから、四百年ほどまえ――。
長かった戦国時代も、豊臣秀吉によって日本じゅうが一つにまとめられ、ようやく平和がよみがえったころでした。
そのころ、各地の領主は、秀吉のごきげんうかがいに、けらいをつれて京都にでむいていました。
が、遠いみちのくのはてからやってきた、津軽のさむらいなどに、みやこの人たちは目もくれません。
なによりもくやしかったのは、町の人々から、「いなかざむらい」といってののしられることでした。
このまま、だまっていたのでは、津軽のめいよにもかかわる――。
為信は、家老の服部長門守をよんで、そうだんをしました。
「なんとも、むねんでならぬ。なにか、いいちえはないかの？」
「さようでございますな――。それには、町のやつらのどぎもをぬくような、きばつなものでもつくって、ひとあわふかせてやるにかぎります。」

と、話はすぐまとまりました。

文禄二（一五九三）年、旧暦七月五日の夜のことです。

ちょうど、うらぼんで、京都の町では、どこの家でもしめやかに、死んだ家族の霊をむかえる門火をたいていました。

そこに、とつぜんあらわれたのは、ふえやたいこの音もいさましく、目をみはるばかりの大どうろうだったのです。

その絵もまた、血をわきたたせる、いさましいたたかいの図でした。

「こ、これはなんだっ？」

「まるで、とうろうのばけものじゃ。」

人々は、びっくりしました。

家のなかにいるものも、みな、そとにとびだしました。

やがて、それは津軽のさむらいたちが、くりだしたものだとわかりました。

京都の町の人々のどぎもをぬいた大どうろう――。

ネプタは、こうして起こったともいわれています。
いいつたえは、まちまちであっても、長いれきしと、古いしきたりをもってうけつがれてきたネプタは、津軽の人たちのほこりであり、心のよりどころだったのです。
七日間のネプタまつりに、津軽の人たちは、うちにとざした情熱を、いっきにもやすのです。

高沢のことしの子どもネプタは、きょねんより、ひとまわりも大きなものです。
高さが、三メートルをこすおうぎがたで、それを台車にのせると、四メートルちかくになるよていでした。表絵になにをかくかも、もうきまっていました。
きょねんは、「三国志」からとった逍雲のたたかいをあらわしたものでした。
かぶとをかぶった逍雲が、すさまじいぎょうそうで、わるものとたたかう絵でした。
が、ことしはちがいます。
「水滸伝」からとった、楊志のとらたいじの絵です。
たけりくるう大とらを、怪力の楊志が、赤いふさのついたやりで、みごとにたいじする絵

ができるはずです。

絵をかくのは、古くから大人のネプタ絵を手がけてきた、村のお寺の住職で、とくべつに子どもネプタの絵をひきうけてくれました。

ネプタのつなをひく引き子や、おどりばやしのはね人、ふえのかかりなどは、七月になってからきめてもまにあいます。

しかし、たいこの打ち手だけは、いまからきめて、れんしゅうをしなければなりません。が、そのメンバーが、まだそろわなかったのです。

ゆるやかに津軽平野を流れる岩木川をさかのぼっていくと、弘前ちかくで二つにわかれます。左を浅瀬石川とよび、それをたどると、流れはしだいにはやさをまし、まがりくねって、黒石の町にはいっていきます。

黒石は、小高いおかに家々がたちならぶ古い城下町で、江戸時代には津軽藩の分藩のあったところです。

むかしから、米とりんごを移出する、商業の町としてさかえてきました。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com